

織り上がったばかりの生地が、次々と精練機にかけられる。その横では染色機が「ジーン」と音を立てて回転し、精練が終わった生地が濃い色に染まっていく。丸井織物が4月、石川県中能登町の本社近くに新たに開設した工房「Dスタジオ」の光景である。

生地を織るのが仕事の機屋にとって、専門外の染色に手を染めたのは、「機屋が単なる生地提供者になっては生き残れない」という危機感からだ。

## 生き残るために

DスタジオのDは、染色を意味する英語の頭文字から取った。精練から染色、仕上げ、見本作成の各工程に対応する小型機をそろえ、自社製品の染め試験を担う。染色の専門家まで配置した。

新製品は、Dスタジオで最も適した染色の条件を確定した上で、染工所へ量産発注される。このような設備を持つ織物業者は全国でもまれ。宮本徹社長が、機屋にとっては未知の世界に踏み込んだ背景には、合繊メーカーが委託加工の海外シフトを加速してきたことがある。

白生地の試験染色を外部の染工所に委託する従

## 挑む

## 試作期間 3分の1に

商品開発のスピード化へ、精練や染色の試験機をそろえた「Dスタジオ」＝石川県中能登町



来のやり方では、生地の企画から試し織り、染色までに1カ月近い期間を要した。この期間を3分の1、15日ほどに短縮できる。古瀬久良常務兼開発・営業部門長は「生地づくりが求められる時代になったと指摘する」。

強縮する。開発期間の短縮はすなわち、競争相手のアジア勢と戦う上で大きな武器になる。

## 縫製も検討

「繊維製品はわれわれがつくった白生地が最終形じゃないからね。色を染れ、斜陽と言われて久し

く、提案力を高めるため、最終製品の見本のデザイン、縫製も自社で行うことも今後検討する」といふ。

国内に流通する繊維製品の97%が中国をはじめとする海外製品で占められ、斜陽と言われて久し

い日本の繊維産業。ここで、グローバルで見ると合成繊維の織物は少しずつ成長している。やり方次第だよ」と宮本社長。スピードと提案力を磨き、北陸から商機をつかみ取る。

## 取材メモ

丸井織物（石川県中能登町）衣料、産業資材織物の製造販売。1937年、グループ企業の宮本織物が創業。56年、丸井織物設立。グループ全体での生産量は月650万疋。

## 自前で染色工房